

私のJHeC2020エントリーエピソード

アイデアコンテスト部門ファイナリスト

湯野川 恵



JHeC2020 授賞式の様子
湯野川恵さん（左）、江崎禎英 政策統括調整官（右）

「食べられる塩分管理を実現したい」

ジャパン・ヘルスケアビジネスコンテスト（JHeC）
2020 アイデアコンテスト部門で優秀賞を受賞された
湯野川 恵（ゆのかわ めぐみ）さんに、
コンテストに応募した当時の状況や現状に
ついてお話を伺いました。

Q 「JHeC2020 にエントリーしようと思ったきっかけについて教えてください。」

応募のきっかけは主に2つあって、1つ目はビジコンに出たら協力者や協力企業を得られるかなと思ったこと、2つ目は起業経験が全く無く、自分の考えていることがビジネスとして成り立つのかどうか自信がなかったので、ビジコンに出て客観的に評価されるものなのかを試したかった、ということです。

ビジコンで審査されるとなると厳しい目で見てもらえますし、言い方は少し悪いですが自分のアイデアのブラッシュアップとかにも「使える」「活用できる」のではないかと考えて応募しました（笑）。私は、JHeC2020 が最初に応募したビジコンなのですが、応募しようと思った当時のことを思い返してみると、経産省という名前があって大きそうなビジコンだなと思ったのと、アイデア部門があったのも大きかったです。他のビジコンの情報も見てはいたのですが、「事業化している」「次年度に事業化する予定が確定している」ことが参加条件に含まれているビジコンが多かった中で、JHeC のアイデアコンテスト部門ではアイデアの段階で応募できたのも当時の自分の状況に合っていたと思います。

Q「実際に参加されて良かったなと感じたことはありましたか？」

自分が考えている、塩分管理サービス「さがそると」に自信を持てるようになったのは一番の収穫だと思っています。優秀賞を獲得できたというのが自信に繋がって、**ビジコン参加後は「自分のアイデアはこんな風に発展すると思っているから協力してほしい」と自信を持って対外的に話ができるようになったのは、一番良かったと思っています。**実際、JHeCに参加したことを説明すると、「ちゃんとしたイベントに参加していた」ということで（協力依頼先などに）話を聞いてもらえることも多いです。応募時に、経産省主催だから参加しようと思った直感は間違っていなかったんだなと感じています。

Q「コンテスト応募時や最終審査へ進まれる過程で見つけたご自身の課題などはありましたか？」

アイデアの背景（課題認識）の整理が自分で思っているほど出来ていなかったなと感じました。**なぜ自分はこのアイデアを重要だと思っているのか**といった、**土台部分**を考えることに一番苦勞したかもしれません。自己分析が足りていないなと感じたのは就職活動以来でしたが、自分の想いを言語化する良い機会だったと思います。

Q「一次プレゼン審査通過後に、アクセラレーションを受けていただきました。その感想をお聞かせください。」

色々な経験をしているプロに見てもらおうと、プレゼンってこんなに良くなるものなんだと思いました。プレゼンが良くなったというのは、**小手先の見せ方でなく、本質的な部分としてブラッシュアップできたと思っています。**課題認識や重要な点について興味を持ってもらい理解してもらうために、どこを掘り下げどのように資料に落とし込むかといったところで、今でも説明資料を作成する際に活かされています。

また、私のアイデアは自分が病気になった経験に基づいていますが、コンプレックスみたいなものもあり、初めは“ビジネスの場でアピールするのはどうなんだろう”という気持ちもありました。ですが、アクセラレーションの中で、「アイデア部門の場合は、見に来ている人も“どういう人なのか”ということを見て協力したいと思えるか判断するから、自分のエピソードはどんどん出していった方がいい」とアドバイスをいただいて、これがきっかけになりアイデアの背景も含めて自信を持って話せるようになりました。

Q「コンテストに参加される前後で、コンテストに対する印象など変わったところがありましたか？」

参加前はお堅いイメージがありました。「経産省」が主催だし、規模も大きそうだと思ったので。アイデアがビジネスとして考え抜かれていないと、受け入れられないだろうかという不安もありました。ただ、実際に参加してみると、**アイデア部門は「ビジネスとしてマネタイズできそうか」ということではなく、人間性やストーリーなど広い視点で評価されるので、「お堅い」と思っていた印象は無くなりました。**

また、アクセラレーションがあったことも大きく、勢いで応募した部分もありましたが、なんとかなりました。私自身、応募した段階ではマネタイズについてあまり考えられていませんでしたが、「課題認識の背景や熱い気持ちがあれば評価してもらえる」ということを、今年度の応募を検討されている方にお伝えしたいです。

Q「コンテスト参加をきっかけに、アイデアを形にする想い・起業への想いなどご自身の中での変化はありましたか？」

絶対に自分のアイデアを形にしようと思うようになりました。コンテストで評価いただいたことで、自分のアイデアが世間に求められているということが分かり、**私がやるべきという使命感のようなものを持って活動するようになりました。**

閉会式で江崎政策統括調整官から頂いたコメントも、そう思ったきっかけの一つで、今後のヘルスケア産業は、そもそも病気にならないようにするにはどうすべきかを重視しないといけないという方針を述べられていました。私の場合は病気が悪化しないように減塩しているため、病気の人を対象にという視点になっていました。ですが、減塩は病気の予防にも繋がることに気付き、自分が思っている以上に減塩が貢献できる範囲は広く、世間から求められているのではないかと考えるようになりました。

実際に、コンテスト参加をきっかけに、サービスの方針を、病気の進行抑制に絞った内容から、予防医療という方向性に転換しました。

Q「コンテスト参加後のフォローとして、審査員との面談を受けられましたが、アイデアにどのような影響がありましたか？」

コンテストが終わってから色々考える中で、コンテスト発表時のコンセプトである「アプリでサービス提供する」というモデルは、開発資金面の問題もあり難しいかとも思い始めていました。そういった悩みも、面談の中でぶつけながら議論させていただく中で、アプリ提供は最初のステップとしてマストでないことに気付き、スモールスタートしたいという想いが強くなりました。

極力開発資金を抑えるため、自分で出来ることから始めようと考え、今はリーフレットとウェブメディアを軸に検討を進めています。アプリ開発は次のステップとして実現したいと考えています。

面談の中で、抱えていた違和感が具体化され、ビジネス化の方向性を再考するための頭の整理ができたと思っています。

Q「昨年度、優秀賞を取得された“先輩”から、応募を検討されている方々へメッセージをお願いします。」

アイデアコンテスト部門は事業化している必要はないのですが、私自身、「アイデアってどれくらい検討できていないといけないんだろう」と気にしながら応募しました。ただ、実際に参加して思ったことは、アイデアを実現したいという気持ちが重要で、アイデアそのものは些細なものでも応募できるし評価されるということです。**アイデアを具体化するための第一歩として、ブラッシュアップに付き合ってもらおう、くらいの気軽な気持ちで応募して欲しいな**と思います。

湯野川さん、ありがとうございました。

最後にコメントいただいたように、

ご関心のある方はぜひお気軽にご応募いただけたらと思います。

皆様からのご応募、お待ちしております！
